

渡辺啓吾

経験年数1~3年といった15人の林業改良指導員に講義をおおせつかったので、話のはじめに、講堂のすぐそばに野うさぎを金網の中に飼育していることから思いついて、次の設問を試してみた。

「雪原にある野うさぎの足跡は、職業がら皆さんよく見られることでしょう」と、小さな足跡をたてにつづけて2個並べ、その下方の両側に大きな足跡を1個ずつ黒板に書いて、「さて、このうさぎは、どちらに進んでいるのでしょうか？」

答えは上方へ進むが7人、下方へ進むが6人で、不明が2人であった。正解はうさぎに書いてもらうことにした。

わたくしは野うさぎ飼育をしている昆虫野兎鼠科の担当でもあるので、ときどき林業関係のお客さんにいたずらをしてきいてみる。はっきり答えられる方はなく、考えた末、反対の方をいわれる人が多い。

身近なことが案外わかっていない。勉強とか研究とかいうと身近なものを落して、遠いところのこと、抽象的なことにとりかかるムードがあるとすれば、これは明治以後の文明開化教育のおかげで、つまり、アチラのことアチラ風のことを学ぶのが勉強というように訓練されてのことかもしれないと思う。

とくに林学ではドイツからのほんやく講義を貴重な青春の持主である学生に与えては退屈させていた。退屈しながらも、身近なことより、ドイツ語をひとつ覚えることの方が、はるかに尊重されるらしいことを知らずに覚えてしまう。そして後進国式エリートたちが誕生する。

1968年3月号科学朝日の四手井京大教授の「ヨーロッパの自然をみて」——日本林学がおかした誤り——はヨーロッパと日本の森林のちがいを、自然環境のちがいを驚きをもってとらえているが、実に参考になる文である。

例えばイギリスでは高木になる木はマツ1種であること、ヨーロッパ大陸ではマツ2種、トウヒ1種、モミ1種とカラマツ1種であること、スカンジナビアではマツ、トウヒ各1種、広葉樹ではナラ2種、ブナ1種、カンバ2種であること。そしてどの地方でも高木林内には低木が非常に少ないこと。

これを北海道と較べると、高木は90種ほどもあり、低木の種類はそれよりおおく、そのちがいは驚くほどのものであることがわかる。しかしわたくしが驚くのは幾多の林業林学の先人がヨーロッパをみながら、いまにしてベテランの林学教授が、驚きをもってそのちがいを報告していることである。これらのとらえ方は、すでに昭和初期に和辻哲郎がその名著「風土」で展開したところではなかったかと思うが、当然ご承知であろう教授にして、なお予想外の驚きをもたらしたほどヨーロッパの森林は単純なものであったようである。

北海道百年でオリンピックまで開けるようになって、殖民地気風もぬけつつある北海道である。世界にも比類のない、すばらしい北海道の森林であるから、自主独立の北海道人の目をもって、それから他を見、聞き、研究し、育てていきたいものと思う。 (研究第一部長)